

遺留品から沖縄戦を学ぶ

【那覇】青森県に住む遺骨収集ボランティアの浜田哲二さん(62)、律子さん(60)夫妻が5月13日、那覇市の県立那覇高校インターアクト部に所属する生徒15人と交流した。沖縄戦時に住民が避難していたガマ(自然壕)などで収集した遺留品を生徒に見せ、「それぞれに持ち主がおり、家族もいた。戦争で人生を断ち切られたむごさや無念さを想像してほしい」と語りかけた。(南部報道部・国吉聡志)

青森の浜田夫妻協力

インターアクト部は、6月瓶、弁当箱などを生徒たちに23日の「慰霊の日」に合わせ見せた。ガマで見つかった、米軍の火炎放射器で焼かれたとみられる米を白い紙に載せてテーブルに置くと、生徒たちは身を乗り出して見入った。哲二さんは、溶けて曲がったビール瓶を手に取り「瓶は高温にならないと変形しない鉄製の水筒や溶けたビール

④遺骨収集ボランティアの浜田哲二さん(前列右から3人目)、律子さん(同4人目)夫妻と交流する県立那覇高校インターアクト部の生徒ら⑤5月13日、那覇市の同高校⑥ガマの中で発見された弁当箱に興味深そうに見入る生徒

壊れた水筒に恐怖実感

戦後80年

い。当時の状況が想像できるだろうか」と問いかけた。律子さんは桃色の頬紅が入った小さな缶を開けて女子生徒に見せた。



頬紅が入った缶

2人は遺留品を生徒たちに回しながら「遺留品に氏名が書かれていれば戦没者の記録から遺族を特定できる場合がある。氏名がない場合も、どうにかして遺族を見つけて返したい。遺留品の写真を撮ってデータベースを作ったり、遺族に返したりする活動を一緒にしたい」と呼びかけた。

インターアクト部部长で2年の比嘉祐音さん(16)は「遺品を手にとると、どのような持ち主だったのかを想像する。壊れた水筒や瓶を見ると戦闘の激しさがイメージできて恐ろしい」と語った。

3年の宜保省吾さん(17)は「沖縄戦の体験者が少なくなる中でも、遺品を通して沖縄戦があったことやその悲惨さを学べる」とうなずいた。

津野教諭は「遺品を通して見えてくる沖縄戦があり、貴重な経験をさせてもらった。(浜田夫妻と)今後何ができるか検討したい」と語った。



軽量級の上間さん総合優勝

那覇で沖縄角

